

『教育フロンティア』5号 一九六四年九月(全国プログラム学習連盟編／教育出版)

ヴィジョンを描け

★無記名。掲載誌は、矢口が代表を務める研究団体の機関紙。

日本の教育は、このままで行けばだめになるといったら、何をいうかと怒られるかも知れない。日本の教育はすばらしいと思っている人が多いからである。

日本の教育に問題を感じている人でもだめになるなどといういい方は大げさだというかも知れない。補修することで行けるといふ考え方の人も多いからである。

しかし世界に窓を開いてみるがよい。教育は急激に轉換しているのである。これまでの教育の延長の上で考えられることはちがうものが無数にあらわれて来ているのである。質のちがいがあるのである。もはや二十世紀前半までの教育のヴィジョンでは片がつかなくなっているのである。

われわれは新しいヴィジョンを描く必然の歴史の中にあるのである。

ここ二十年日本の教育は何をなすとげて来たであろうか。それは戦後教育の修正というように言ってもよいかも知れない。教育の体系にしても、方法にしても、戦後の轉換時代とはかなり異なったものとなっている。それをわれわれは戦後の混乱を克服し、直決的教育を改善すると自覚して營々と努力して来た。さて今に至ってこれを振り返ってみると、なんとその教育の本質

が三十年前の教育観を一步も抜けでていない基本思想によってつくられているとしか見られない。そこには進歩とみられるものがなかったのである。

最近の学力向上運動を見るがよい。論議をかもしている如き受験準備的教育の有無よりも、そういうことが問題にならねばならぬ日本人的教育観が問題である。教育問題として、そういうことがとりあげられなければならぬことが悲しいのである。

世界でも学力の向上が問題になっているが、それはわれわれとは全く次元を異にしたところの問題なのである。その次元を異にした所で問題を究明しなければならぬということが分らないのは悲しい。

新しいヴィジョンを描くといっても、それが押しつけ教育の排除などといった雰囲気の問題になるとしたら、これもまた情ないことである。憲法論議と同じく、うしろむきになってしまいう。前向きとは何かを余程真剣に考える必要があるう。

プログラム学習そのものもまた、その点では深く自省しなくてはならぬ。それは古い教育の中での方法であるのではない。新しい次元のちがった教育の中核体なのだ。